

がはっきりと示された。真に驚嘆すべき氏の仕事が今後一層はげしく進められることをわれわれは願っているのである。

---

稲垣良典著『トマス・アクィナス』

中山浩二郎

トマス・アクィナスの哲学について、これまでも幾つかの著・訳書を刊行されてきた稲垣教授が1979年に相ついで二つのすぐれた業績を発表された。一つは『思想学説全書』（勁草書房）〔以下（A）と略記〕の一卷として、他は『人類の知的遺産』（講談社）〔以下（B）と略記〕の一卷としての『トマス・アクィナス』である。

スコラ哲学の完成期にその代表者として歴大な著作を遺し、現代にまでその影響を与え続けるトマスの全貌を捉えること、しかも叢書中の一卷という限定のもとに描き出すことは想像を絶した難事業であったと思われる。著者自身その困難さを「私はみずから、かつてトマスが歩いた道をたどり、かれによって拓かれた土地に足をふみこまなければならなかった」（B）。「限られた紙数のなかでトマスの思想をあきらかにするために、その豊かな内容の解説と、比較考察とのいずれに重点をおくべきかは困難な選択であり、私はあえて前者をえらんだ」（A）という感慨に託してそれぞれの序文で述べている。

ところで、著者が最も苦心されたのは、神学者トマスと哲学者トマスとの接点において、あえて哲学者トマスの側に立って論を進めたことであったと思われる。それは一方ではトマスの神学を無視してトマスについて何が語られるのかという批判に答えねばならず、他方では人間の学知（scientia）を人間理性に固有のものとして、人間の側からのみ知識を論ずる多くの現代人に、実はその学知の証しする真理が神の啓示する真理と合一することを説くのは至難の業とも言えるからである。

この視点に立って著者は、（A）においては（一）トマスの生涯と著作、（二）信仰と理性、（三）存在と人間、（四）人間と認識、（五）道徳思想と論を進めたのち、

トマスと現代思想という結びで巻を閉じる。また(B)では、(I)トマスの思想、(II)トマスの生涯、(III)トマスの著作、(IV)トマスとトミズムの歴史、そしてトマスと現代思想で結んでいる。その構成は見事であり、論旨は簡潔かつ明快であると共に重要な要旨にそれぞれ註を付してその出典を明示していることは、読者たる私たちにとって極めて有難いことであると同時に、著者の立論の正当性を証するものと言えよう。

さて、この限られた紙数で上記二書の全体を覆って評することは到底不可能なので、私は次の三点に絞って論ずることに読者諸賢の理解を得たいと思う。その一つはトマスにおける「信仰と理性との区別とその総合の問題」、第二には(A)の第三章での「人間から存在へ」、第三は同書第四章での「存在から人間へ」の問題である。これらの問題はいずれもトマスの形而上学的思索と体系とを厳密に跡付けながら、それへの理解をとおして著者自身のトマス解釈と、トマス形而上学の再構成を試みた部分と見るからに他ならない。

自然的光〈*lumen rationis naturale*〉としての人間理性によって継起的・推論的に習得せられる論証的真理と、超自然的な恩寵の光〈*lumen gratiae supernaturalis*〉に照らされ、信仰によってのみ受け容れられる啓示的真理との、これら二つの客観的真理が唯一の真理の根源たる神に由来するかぎりそこに矛盾撞着はありえないとしても、理性と信仰とのいずれが先行すると見るかは中世哲学における大きな難問であった。著者はこの難問を、信仰が哲学的理性よりもすぐれて理性的であるとしたユスティノスと、反対に、哲学的理性の営みは空しい論義にすぎず、信仰とは何の関わりもないとしたテルトゥリアヌスから説き起し、アウグスティヌスからアンセルムスを経てボナベントゥラに至る「知らんがために信ぜん」*credo ut intelligam* という立場への対決の線上にトマスを位置せしめる。而して理性と信仰との区別とそしてその総合とを論ずるのである。

著者は(A)の第二章においてこの区別を、トマスとカントとを比較しつつ「人間理性が自らの固有領域を超え出て、信仰に属することへ立ち入ることは、決してそれ自体『越権』ではない。反対に、人間理性は信仰に属することは自らの理解を超えているのだと謙虚に認めた上で、その探究に従事すべきだ」というトマスの考えを前提として、「哲学もその固有の領域に関するかぎり、あくまでもその探究を

おし進めることが神学の立場からむしろ要求される」、「人間理性にとっての固有領域を確立することは、そのうちに自分らを閉ざすべきことを意味せず、むしろそれを超越すべきことを意味している」として、哲学の自律性を強調する。

この指摘は「信ぜんがために知る」*intelligo ut credam* との原則に立って、「不合理になるがゆえに信ずる」*credo quia absurdum* というテルトゥリアヌス以来の伝統である信仰内容は論証しえないという考え方を、理性の固有性を保持しつつ擁護したトマスの立場を的確に捉えると同時に、哲学者トマスの側に立つ著者の立場を表現したものと言えよう。なぜなら、啓示を受け容れることによって成立する信仰の内容が前提するさまざまな問題、例えば、神の存在証明、神の属性の認識、霊魂不滅の問題等を哲学的理性によって論証しうることは、形而上学即存在論を信仰の先行階程 (*praeambula fidei*) として位置づけると共に、人間理性の自己超越性すなわち著者の言う「存在」の認識を本来的に志向する人間理性の特徴を確認しうるからである。

理性と信仰との総合に関して著者は先ず、人間理性をゆり動かす自然的・本性的欲求としての「結果を見たらその原因を認識しようとする欲求の内在」と、その欲求が第一原因たる神にまで至ること、それにも拘らずその完全な認識への到達不可能であることを考察したのち、区別の項で述べた人間理性の自己超越的性格、すなわち、神の恩寵を期待しつつ自己の固有領域を超え出ようとする性格を改めて検討する。この自己超越性を媒介として理性と信仰との結合が果たされたとする著者の見解は、前に述べた神学の先行階程としてのトマス存在論の立場を的確に把握したものと一言しなければならぬ。「トマスにおける信仰と理性との総合は、理性によって信仰内容の必然性を論証しようとするものではなく、……、信仰を説得的なものとしようとする試みであった」として、理性の固有領域の確立が、実は信仰内容に対する理性の限界の自覚であることをもって、この難問を結論づける。

次に、「人間から存在へ」の道としてトマスの形而上学的思索を探究する (A) の第三章において著者は、3つの段階を解明する。何かがあるという感覚知覚での事実的段階、事物の本質すなわち実体的形相の把握の段階の考察を終えたのちに著者は、第三段階としてトマスの独創性を指摘する。それは、「存在するもの」*ens* の窮極の原理であるかに思われる実体的形相も、事物をこれこれのものとして

規定する原理たる「存在することの様式」*modus essendi* であって「存在」*esse* そのものではない、という自覚である。形而上学の対象としての「存在するものたるかぎりでの存在するもの」*ens ut ens* の窮極の原因 *causa* または根源 *principium* としての「自ら存在するところの存在そのもの」*Ipsum Esse Subsistens* の認識こそを、学としての形而上学の目ざす目的・窮極 *finis* とし、この目的の探究をとおしてトマスの形而上学的考察の地平が開かれるとする著者の見解は正鵠である。

第一段階たる事實的段階からはじめて「存在」の認識への道をたどったことは、感覚的経験のもつ重要性をアリストテレスと共に主張したトマスの人間理性による認識の特性を明らかにするためであったであろう。「かれにおいては形而上学は経験に対立するどころか、経験の深まりが必然的に行きつくべき帰結だった」とする著者の主張はこの事情をよく物語っている。この特性をもちながらも人間精神が根源的に「存在」への可能性においてあり、「存在」という最高の完全性への自然本性的傾向、いわば「存在」へ向っての自己超越性の要求をもつことを確認した著者は、しかしそれだけでトマスの形而上学的思想を素描しえたとは考えない。なぜなら「存在そのもの」の認識に到達しうるためには、それを受容しうる能力としての人間精神のもつ可能性を検討しなければならなかったからである。

こうして「存在から人間へ」の探究の道が始まるが、それはまたトマス形而上学の中での人間論でもある。かくて著者は「心身の問題」と「人間の認識活動」における抽象、真理概念、確実性等を考察してのち「愛による認識」の可能性で論述を終えているが、心身論における知的実体たる人間という指摘、抽象が単なる心理的操作ではなくある種の洞察を前提するとの見解と能動理性の働きの解明、判断の意味と知性の固有の光、「われわれにとっての」確実性と「本性にしたがって」の確実性の区別、「知的徳」*virtus intellectualis* の抽出、「親和性による認識」*cognitio per connaturalitatem* の問題等論ぜられるべき多くの興味ある問題があるが、紙数はつきようとしているので詳細を論ずることはできない。

ただ一つ疑問を呈したいのは理性の「能動性」を「存在」への根源的關係と見る著者が、存在の超越的経験が知性の自己理解において達成される (p. 91) とか、*ens* の形而上学的認識は認識する主体の自己への立ち帰れり *reflexio* を徹底さ

せることではじめて可能となる(同頁)という立場から、「能動知性の働きを経験することが『存在』経験であるとトマスは考えている』(p.128)とする点である。この主張が『De veritate, q. I, a. I.』において「何びとも存在〈ens〉を知るものであるが、知りつつある知性〈intellectus agens〉を知るとはかぎらない、しかしそれなくしては人は何事も知り得ない」と言って、客観主義的認識がそれによって成立する原則、すなわち自覚以前の即自的な認識の成立を第一義とするトマスの主張と、どう関連するかの問題である。ens の認識と esse の認識とは次元が違うと言われればそれまでのことであるが、あえて疑問を呈示しておきたいと思う。

原典に忠実に依拠しつつ論述され、多くの文献をさぐりつつ限られた頁数に豊かな内容を盛られた著者に再び敬意を表したいと思う。また(B)においては原典の訳をそえて著者の主張を支えているが、いずれも、トマスの全貌に接することの少ない私たちにとって貴重な書たることを疑わない。